The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジョージア（グルジア）の民族的文化遺産としての合唱「ポリフォニーPolyphony」 : 20世紀の民俗音楽研究と文化政策を中心に
Author(s)	久岡, 加枝
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61402
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　久岡　加枝　　）	
論文題名	ジョージア(グルジア)の民族的文化遺産としての合唱「ポリフォニーPolyphony」 ―20世紀の民俗音楽研究と文化政策を中心に―

論文内容の要旨

本論文は20世紀のジョージアの民俗音楽研究と文化政策を通じた民族文化「合唱／ポリフォニー」の創出過程を考察したものである。第一章では、ジョージアの作曲家・音楽学者D. アラキシュヴィリ(Araqishvili, 1873-1953)の研究『民謡と民俗楽器に関する比較考察』(1908)の分析を行う。彼はこの著作の中で、上声部「クリマンチュリKrimanchuli」と、独立した各声部の複雑な交わりによって歌われる西部グリア地方の男声合唱の「ポリフォニー」に文化的独自性を見出した。アラキシュヴィリはまた、こうしたジョージアの民俗音楽の特徴が五線譜では表せない音に基づくことを指摘したが、このような独自の音楽文化の重要性をめぐる見解は、1920年代の知識人にも共有された。特に西ジョージアの男声合唱の「ポリフォニー」の要素は、作曲家のK.　ポツフヴェラシュヴィリ(P'ots'khverashvili, 1880-1959)によって「民族の音楽言語」と称され、新聞『コムニスティKomunisti』の紙面において、民族の文化遺産として紹介された。第一章ではまた、こうした知識人に裏付けられた文化的真正性を持つ「エスノグラフィー合唱団Et'nograp'iuli Gundi 」によって、1930年代に西ジョージアの男声合唱の民族文化としての普及が推進された状況を考察する。西ジョージアのポリフォニーの要素は、1937年にモスクワで開催されたジョージア芸術祭「デカダDekada」の公演の際にも重視された。この芸術祭の折りに、モスクワの『プラウダ』紙の中でジョージアの古い歴史を持つ「ポリフォニー」が紹介されたことは、ジョージアのその後の時代の文化政策の方針に多大なる影響を与えた。

第二章では、1930年代末にソ連中央で既にジョージアの伝統音楽として知られた「ポリフォニー」に、その民族文化としての歴史的正統性を裏付ける上で必要不可欠なナラティヴが生成されてきた過程を、音楽学者G. チュヒクヴァゼ(Ch'khikvadze, 1900-1986)の論文「ジョージア音楽：その歴史的概観」(1939, 1940)を基に考察する。チュヒクヴァゼは「異教的」儀礼に起源を持つ合唱等の農村の民俗音楽が、太古から現在まで歌い継がれてきたことを明らかにし、その民族文化としての重要性を訴えた。また彼の研究は、20世紀初頭からアラキシュヴィリらの知識人の間で西ジョージアに比して、西欧やイランの音楽の影響を受けた「非真正」な存在とみなされた東部の合唱形式の民謡に「ポリフォニー」の要素を見出すことで、それらに文化的真正性を与えた点で重要であった。チュヒクヴァゼはまた、ジョージアの音楽文化の特徴として、中世以降の中東諸国の影響を指摘していた。彼が1930年代末にジョージアの音楽文化の「国際的性格」を強調した背景には、合唱の伝統性を重視したE. ベディア(Bedia, 1901-1937)らの同時代の知識人の「右派」を理由とする粛清が関係していた。第三章では、ソ連期ジョージアにおける民俗楽器のオーケストラの活動に焦点を当てる。五カ年計画が始まった1930年代のソ連各地では、様々な音域を持つ新しい民俗楽器からなるオーケストラが編成され、それらは民族文化の象徴的存在であった。また、新しい音域の民俗楽器にピッコロやプリマ等の西欧由来の名称が用いられた他地域とは異なり、ジョージアの楽器には、「バニBani」等の合唱の声部に由来する伝統的な名称が用いられた。一方で、1930年代以降、男声合唱をはじめとする民俗音楽の伝統性が重んじられてきたジョージアでは、民俗楽器のオーケストラの活動をめぐって、トビリシ音楽院の音楽学者の間で批判が生じていた。しかしながらソ連期の民俗楽器のオーケストラは、アコーディオン(ガルモニ)奏者のL. タタライゼなど、ポストソ連期に活躍する女性音楽家を養成する役割を果たしていた。

第四章では、ソ連期のジョージアにおける都市部の工場や大学等に設置されたアマチュア合唱サークルの活動に焦点を当てる。ソ連の大衆文化において、「合唱」というオーケストラよりも自足的な音楽ジャンルが重視されたことは、俸給を受けた「プロ」の男声合唱団の団員以外の人々の合唱への参加を促した。ソ連期の合唱サークルのレパートリーには、西欧の音楽語法に基づく民謡編曲作品が含まれたが、西欧の楽器とジョージアの民俗楽器の融合に基づくオーケストラの活動が伝統主義的な立場から批判された事に対し、合唱サークルにおけるこうした「アカデミズム」は必ずしも批判されなかった。その理由としてジョージアでは、20世紀初頭からロシア国民楽派の流れを汲むZ. パリアシュヴィリ(P'aliashvili, 1871-1933)らの作曲家の間で、合唱形式の民謡を素材に新しい「民俗音楽」を生み出そうとする価値観がソ連期以降も影響力を持ったことがあった。様々な地域の民謡編曲作品が歌われたソ連期の合唱サ

ークルは、男女を含む参加者が共同体意識を育む場として機能していたといえる。こうした活動の経験者の中には、現在も民族共同体意識と結びついた民謡祭の主催者として活動する者も存在する。

第五章では、合唱サークルで歌われた民謡編曲作品について、Sh. ムシュヴェリゼ(Mshvelidze, 1904-1984)の混声合唱曲『プシャウリP'shauri』(1934)の創作から考察する。1920年代からジョージアではI. ストラヴィンスキイ(Stravinskii, 1882-1971)の他、新ヴィーン楽派の一連の作品の受容が進んでいた。こうした影響下にあったムシュヴェリゼは、1930年代のエスノグラフィー合唱団のレパートリーに含まれなかった北東部のプシャヴ人の儀礼歌を題材に、モンタージュの技法を駆使した民謡編曲作品を創作した。ムシュヴェリゼはこの作品の中で、「フリギア旋法」に基づくプシャヴ人の合唱の要素の他、東部や西部の合唱の和声やリズムの要素を取り入れることで、辺境の北東地域の音楽文化を民族文化の中に位置づけようとした。第六章では、第二次世界大戦以降の民俗音楽研究に焦点を当てる。1950年代に科学アカデミーの音楽学者Sh. アスラニシュヴィリ(Aslanishvili, 1896-1981)は、『ジョージア民謡に関する随想』(1954, 1956)の中で、東部に広まる儀礼歌「イアヴナナ」の旋律を、民族文化「合唱」の基層として位置づけた。彼の研究が当時の民俗音楽研究の分野において評価された理由は、民族文化の基層となる要素を、具体的な旋律や和声終止形によって提示したことにあった。またこうした研究の手法は、B. アサーフィエフ(Asaf'ev, 1884-1949)の『過程としての音楽様式』(1930)に影響されたものであった。1950年代末のアスラニシュヴィリの研究は、旋律等の起源を民族の起源と結びつけた点で同時代の音楽学者の文化認識に多大なる影響を与えた。

第七章では、アスラニシュヴィリの影響下にあったトビリシ音楽院の音楽学者V. アホバゼ(Akhobadze, 1918-1971)によって、1950年代末にアブハジアとジョージアの合唱形式の民謡の和声終止形に共通性が見出され、アブハジアの音楽文化を同化する言説が影響力を持った事実に焦点を当てる。このような状況の中で出版されたI. ハシュバ(Khashba, 1938-1967)の『アブハジアの民俗楽器』(1967)からは、アホバゼの見解に対し、アブハジアの知識人が、アブハズ・アディゲ語族の文化的同族性を主張することで異を唱えていたことが明らかである。ハシュバ以降のジョージアの研究者や、現在のロシアの研究者の間では、アブハジアの音楽について、アディゲアを含む北西コーカサスの音楽文化の文脈で論じる傾向が強い。一方でアブハジアの合唱が1930年代以降の主要な男声合唱団のレパートリーに含まれ、「ジョージアの民族音楽」として対外的に発信され受容されてきたことは、現在もこの地域の音楽文化に対する名残惜しい感情を国民の間に残している。

第八章では、1957年のモスクワの世界青年芸術祭における西部グリア地方の男声合唱団の活躍を期に、「ポリフォニー」を中心とする「合唱」の民族文化としての重要性が再び高まる中、1930年代から文化政策の中で等閑視されてきた南西部メスヘティ地方で合唱の復元を通じた民族文化への同化が進んだ状況に焦点を当てる。トビリシ音楽院の作曲家のV. マグラゼ(Maghradze, 1923-1988)は、1960年代以降、アスラニシュヴィリによって提示された民族文化の基層となる旋律のデータを基に南西部の村々で民謡を収集し、それらを基に他地域で歌われる3声部の合唱の復元を行った。彼によって復元された合唱は、現在もメスヘティ地方の合唱団で歌い継がれる。

第九章では、1980年代以降のトビリシ音楽院の学生E.ガラカニゼ(Garaqanidze,1957-1998)を中心とする民俗音楽の伝統復興運動に焦点を当てる。ジョージアでは1960年代からトビリシ音楽院の学生をメンバーとするゴルデラ合唱団によって1930年代には公に歌われなかった聖歌がステージで歌われるようになり、学生を主体とした民族文化の復興運動が盛んであった。都市部の合唱サークルの他、1960年代の伝統復興期の前述の男声合唱の演奏について、メランコリックな感情表現に基づき、ジョージア音楽と西欧音楽の中間のようであると非難したガラカニゼは、彼のアンサンブル「ムティエビMt'iebi」の活動を通じて、鷹揚な男性性に基づく「農民の合唱」の再現を追求した。1980年代のジョージアの若い世代の間で、ガラカニゼの音楽の新しさや面白さに関心が高まったことや、同時期の資本主義圏における「ワールドミュージック・ブーム」の中で日本やアメリカの知識人の間で、ジョージアの民族（伝統）音楽「ポリフォニー」に関心が集まったことは、ポリフォニーをはじめとする民俗音楽の保存活動をジョージアの知識人の間に促し、ポストソ連期のユネスコの世界無形文化遺産登録へ向けた動きに繋がった。

第十章では、北東部を拠点に発信されるポストソ連期の新しい民謡とその社会的影響力について、国民的歌手L．タタライゼ(Tataraidze, 1949-)の活動から明らかにする。彼女が歌う北東部トゥシェティ地方の音楽は1930年代以降の主要な男声合唱団のレパートリーには含まれなかった。個人による対外的な音楽活動が自由になったポストソ連期において、こうした周縁地域の新しい存在として本国の幅広い社会層の他、欧州で注目を集めた。その一方で民謡の所有をめぐる問題が、個人の利益と結びつく中で発生している。ジョージアの統一を目標に掲げ活動するグリア地方出身のJ. チュクアセリ(Chkuaseli, 1935-)のアンサンブル「エリシオニErisioni」では、北東部の民謡がテーマ・ソングとして用いられるが、タタライゼの音楽の地域性やジェンダー性は、現在もなお、グリア地方出身の男性音楽家が民族文化の担い手として影響力を持つジョージアの音楽界において一定の存在感を示している。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（久岡加枝）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	伊東 信宏
	副 査	大阪大学　教授	永田 靖
	副 査	大阪大学准教授	輪島 裕介

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：ジョージア(グルジア)の民族的文化遺産としての合唱「ポリフォニーPolyphony」
— 20 世紀の民俗音楽研究と文化政策を中心に—

学位申請者　久岡 加枝

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　伊東 信宏
副査　大阪大学教授　永田 靖
副査　大阪大学准教授 輪島 裕介

【論文内容の要旨】

ジョージア（グルジア）の民俗音楽では、多声合唱（しばしばそれは国外に向けて「ポリフォニー」と呼ばれる）が特徴的である、とされてきた。だが、本論文はそのような認識を構築的なものと捉え、それがいつごろ生じ、どのように強化され、純化されてきたか、ということを、ジョージアの民俗音楽研究史を辿ることによって浮かび上がらせようとする論文である。以下に、全１０章からから成る全体の概略を順に述べる。

まず序章は、現在のジョージアにおける合唱をめぐる状況に焦点を当てた後、本論文の目的と構成が明らかにされる。そして第一章では、ジョージアの民俗音楽研究の父として位置づけられる D. アラキシュヴィリ(1873-1953)の 20 世紀初頭の民俗音楽研究と、1930 年代の男声合唱団「エスノグラフィー合唱団」の創設に象徴される文化政策の状況が論じられる。第二章は、男声合唱に、農村共同体にルーツを持つ、太古からの歴史的正統性が裏付けられていく過程を、民俗音楽学者 G. チュヒクヴァゼ(1900-1986)の著作との関連で論じる。第三章から第五章では、ソ連文化一般に共通する、民謡編曲作品や、民俗楽器オーケストラ、アマチュア合唱サークルといった制度が、「男声合唱」には本来含みきれない女性や周縁地域の要素を民族文化の中に取り込む上で果たしてきた役割について考察を試みる。第三章は、1937 年にジョージアで発足した民俗楽器オーケストラの役割について、このオーケストラの指揮者 K. ヴァシャキゼ(1910-1991)の活動から考察するものである。第四章は、「アマチュア芸能活動」と呼ばれる、工場や大学に組織された合唱サークルで行われた音楽の愛好家の活動について考察している。さらに第五章で扱われるのは、作曲家の Sh. ムシュヴェリゼ(1904-1984)の混声合唱曲である。第六章は、第二次世界大戦以降の Sh. アスラニシュヴィリ(1896-1981)の民俗音楽研究を論じる。彼の見解は、女性の音楽の他、北東地域などの文化的「周縁」を、「男声合唱」の祖型として位置づけるもので、民族文化の中にこれらの要素を取り込む上で、重要な役割を果たした。第七章では、アブハジア出身の民俗音楽学者 I. ハシュバ(1938-1967)による研究から、北コーカサス諸民族の音楽文化がジョージア文化

の中にいかに位置づけられてきたかについて論じている。第八章は、ジョージア南西部において、男声合唱の復元が、V. マグラゼ（1923-1988）によって進められた状況について考察している。第九章では、より真正な男声合唱の演奏形態の復元を推進したトビリシ音楽院の民俗音楽学者、E. ガラカニゼ(1957-1998)の活動に焦点を当てる。そして第十章では、ポストソ連期のジョージアの音楽文化の現状について、L. タタライゼ(1949-)などの北東山岳系集団の女性音楽家を中心に歌われる、大衆的な影響力を持つ新しい音楽ジャンルの例を取り上げている。

結論では、20 世紀の民俗音楽研究や文化政策が、現在のジョージア国民の民族文化「男声合唱」をめぐる言説にいかに影響を与えたのか考察を加え、さらにこうした言説とは異なる、男声合唱の実際の音楽文化としての性格について改めて分析している。

本文 171 頁に加え、参考文献が 10 頁、さらに文中で触れられる多くの音例について、CD-ROM による参考音源が付されている。

【論文審査の結果の要旨】

ジョージアの民俗音楽は、極めて興味深いものが多く、愛好者も一定数存在するが、日本ではまだまだ情報は少ない。まして、それを上記のように、メタレベルから総括する研究は、日本では初めての論文である。このような研究は、ジョージア本国でもまだほとんど行われておらず、国外の研究者によるものが萌芽的に見られる程度である。その意味で、本論文は価値が高い。言語的には、グルジア語はもちろん、ロシア語、英語、日本語の文献、資料を参照しており、貴重な論考である。

民族音楽研究史のメタレベルの記述としては、２０世紀の初めからほぼ現代まで、上記のような様々な研究者、団体、ジャンル、演奏家などのトピックを扱って、総体としてジョージアの民俗音楽の歴史を浮かび上がらせている。しかも、現地の資料や言説を扱いながら、現地のナショナリスティックな論理に埋没してしまわずに、それを常に批判的に検証しようとする姿勢は一貫している。

ただ、ほぼ年代順に並ぶ各章は、その間の関連、それら各事項をつなぐ論理が見えにくいところがあり、その関係を整理した文章があるべきである、との指摘があった。特にここで詳述されているジョージアの状況と、ソ連の文化政策との関係はもっとはっきり描かれるべきであろう。おそらくここでは１）ソ連中央の文化政策の変遷、２）ジョージア中央の方針、３）ジョージア周辺部の動きという３つの軸が必要なのであり、それらがお互いに作用反作用を起こしながら、どのように展開していったかという議論が展開されうる。

ただしこれらの課題は、本論文が丁寧に跡付けた研究史に立脚して初めて浮かび上がってくるものであり、そういう論点を明らかにしたこと自体、本論文の成果の１つであると言えるだろう。このような研究史的な視点は、（本論文以外には）まだ十分な厚みもなく、今後の課題と考えるべきである。

本論文は、情報の少ないジョージアという地域の音楽の研究として、日本語ではこれまでにない水準で成果をあげており、博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと考えられる。